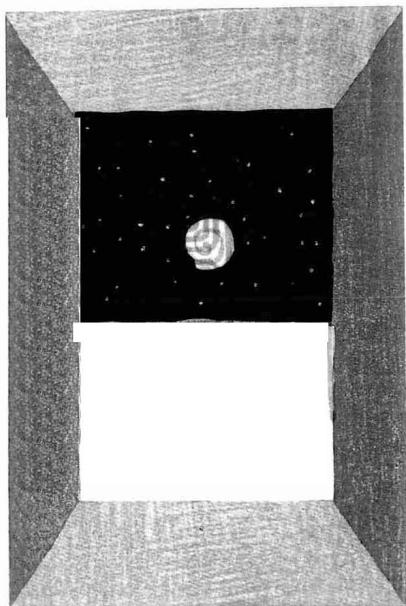




冬の少年

清水邦夫

講談社

冬の少年

一九九〇年五月三〇日 第一刷発行

著者——清水邦夫

© Kunio Shimizu 1990, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号三三 電話東京三—九五—二三(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

定価——一七〇〇円(本体一六五〇円)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛に願います。

ISBN4-06-204719-5 (文1)

目次

暮市 5

冬の少年 85

B^ばA^あR^ばB^ばE^あR^あ・中ノ郷 163

B^ばA^あR^ばB^ばE^あR^あ・ニューはま

装画 山中現
装幀 中島かほる

小説集
冬の少年

暮
市

一

岩田楼は、たてにおそろしく長い家であった。間口三間、奥行十五間。

しかし北国街道がたらぬく新井市では、"うなぎの寝床"のような町屋づくりの家はごくふつうであり、ことさら岩田楼が目立つというわけではなかった。

町屋づくりの定型は間口三間に奥行十間、それから見ると岩田楼は奥行だけ五間長いことになるが、この五間は単なる五間ではなくして、この町の分限者としての象徴でもあった。古い時代に、"間口三間以上はかなわす"と決められ、そのことを町のヒトは律義に守りつづけたので、増築したくても奥行しかのばせない。その結果、裕福な家はさらに裕福になるにつれて、家型はますますたて長の奇怪なものになっていった。つい十数年前までは、"うなぎの寝床"型の家が市内に数十軒あったが、近年バタバタと改築され、目抜き通りの安楽町では、のったり横たわる岩田楼一軒だけを残して、あとはきれいさっぱり姿を消してしまった。

岩田楼は、かつて蠟点所の請負業をやっていた。蠟点所とは、蠟の生産から販売までをやるとこ

ろで、この辺りを支配していた高田藩の直営であった。それがやがて販売については請負制にかわり、岩田楼ともう一軒が蠟間屋の役割をするようになった。もっともその頃は、岩田屋とか岩田蠟座とか名のついていたようだが、明治になって芸妓置屋兼料理屋をやるようになって、屋号を岩田楼とあらためたのである。

岩田銀子の葬儀は、その岩田楼の表口の軒先でおこなわれた。表座敷を使うとか、いまは家具屋になっているその店内を使うとかそういうのではなく、軒先だけを利用して祭壇がかざられ、棺が安置された。

その日はうす曇りだったので葬儀はどこおりなくすすんだが、雨が大ぶりになったら急遽近くの寺に移しておこなわれる手筈になっていた。軒先だけの葬儀は誰が見ても異様なものであったが、現在岩田楼が他人の家具店に賃貸されているため、やむなくこのような事態になったのである。

銀子の従弟にあたる信次郎は定刻に遅れて参列したが、いったい誰がこんな形式にこだわったのだろう、それは故人の遺志なのか、よもやそうではあるまいと、いささか滑稽に思いながら読経をきいていた。

会葬者へのあいさつは、なにかの都合なのか、出棺の前におこなわれた。銀子には夫も子どももいなかったのだ、銀子の弟、芳太郎の息子利夫がマイクの前に立った。彼は現在の岩田楼の当主であり、この日の喪主であった。利夫はまだ三十前のせいかいさつもぎごちなく、時々絶句しては

天をおおぎ、そのたびに参列者たちの列は少しゆらいだ。

いよいよ霊柩車に棺がのせられる段になった時、信次郎は利夫に、「おねがいますか」といわれたが、頭を横にふって棺から離れたところに位置をとった。

棺を運ぶのが、別にいやだったわけではない。ただ、昔銀子がよく口にしたことばがひょいと頭に浮んだせいであった。

「ねえ、見ていてちょうだい」

これが銀子の口ぐせだった。

たとえば運動会があり、銀子が百メートル競走に出場するとする。そんな時、弟の芳太郎と従弟の信次郎をつかまえて、必すこう宣言するのである。そして、あとでまた確認する。

「見てた？」

一度など、見ていなかったために信次郎はいきなり平手打ちをくったことがあった。

このことばは、大人になってからも何度かいわれた。

「いいの、あんたは黙って見ててちょうだい」

このことばのせいで、信次郎はしだいに銀子の観客の立場になっていった。今日も観客でいよう、客席から最後の別れをしようと、その時信次郎はとっさに思ったのだった。

銀子の棺は、信次郎の知らない人達の手で霊柩車に運びこまれた。信次郎が知らないということは、もしかしたら銀子ともあまり付合いのなかった人達ではないのか。気のせいか、棺は無造作に

ストンといった感じで押しこまれた。それがかえって銀子らしいすばやい身のこなしに見えた。

軒先での葬儀はやはり銀子の遺志だったのかも知れない、それを見て信次郎は思った。銀子はおそらく、岩田楼から自分の棺を出してもらうことにこだわったのではあるまい。そうではなくて岩田楼の軒先から出すことに彼女はこだわったのだ。それが銀子らしい冗談であり、銀子らしい本音の見せ方だった。信次郎には、銀子のこだわりの深いところはいまひとつ判然としなかったが、この想像はほぼまちがってはいないように思えた。

その信次郎の耳元に、ふたたび銀子のことばが、彼女独特のかすれ声で甦ってきた。

「さあ、見ててちょうだい」

霊柩車の扉が閉められ、意外なスピードで銀子の棺は走り去った。

信次郎は火葬場へはいかず、遠縁の老女お兼さんと一緒に利夫の家へむかった。

家には小さな子ども二人と近所の主婦が一人いるだけで、無用心だから誰かそっちへまわって欲しいと利夫にいわれた時、

「わたしが……」

とお兼さんと信次郎が同時に声を出した。

お兼さんは火葬場がきらいだからといい、信次郎は徹夜仕事でつかれてうるえに汽車で眠れなかったと弁解し、周囲はそれならと納得したのである。

信次郎はつかれていたことは事実だが、内心火葬場へいくことは蛇足だと思っていた。銀子の退場はもう見とどけた、そんな気持がつよかった。

利夫の家は、岩田楼から一キロほど離れた丘陵の中腹にあった。新興住宅地で、同じような家々がひな壇にならぶように肩をよせ合っている。サラリーマンである利夫が、岩田楼を家具店に貸してこちらへ引越したのは五年か六年前のはずだった。小人数の家族にとって岩田楼のような大きな家は必要ないというのが理由だったが、父親の芳太郎の死がその引越しのきっかけになったことはたしかだった。

利夫の家へつくと、お兼さんはわが家のような振舞でお茶を出してくれた。この町に住むお兼さんはしょっちゅう遊びにきているらしく、家のなかを走りまわる利夫の子どもを遠慮なく叱りつけている。

「へえ、ここが初めて……」

信次郎が利夫の家へ足を踏み入れるのが初めてと知ると、眼を丸くしておどろき、リビングの天井を指さし、

「この上の六畳に、銀子サンは住んでいたんだワ」

といい、そうだ、部屋を案内するからと腰を浮かした。信次郎はあわてて、それはまたあとでおしとどめると、そう、と不満そうに座りなおし、利夫たち家族がここへ引越してじきに、銀子が東京からもどってきたことを話した。

「その時はもう、肝臓を悪くしてたんですか」

「うん、白目がもう黄色かったような気がするんけど」

信次郎がきかされた銀子の死因は、食道静脈瘤の破裂ということだった。これは肝硬変が悪化しておこるものらしい。

「東京にいた頃、会わなかった？ 銀子サンと」

「一度だけ会いました。それも十年ぐらい前かな」

「へえ、そんなに会わなかった」

お兼さんは一瞬とがめるようないい方をした。二人がそんなに疎遠になっていたのが解せなかったのだろう。

このあと信次郎は一時間ほどソファの上で仮眠した。そして目をさまし、さてどうしようか、一晩ここに泊めてもらうかそれとも最終の特急で帰京するか、しかし日帰りというのはあまりに素っ気ないと思われるか、などと迷っている時、利夫たちが火葬場からもどってきた。

「あの、ちょっと」

遺骨が芳太郎の仏壇の前におかれ、短かい読経がすむと、利夫はネクタイもゆるめずそのままのかっこうで、信次郎を階段下へ呼び出した。

「伯母さんの部屋、見てくれませんか」

「なにか」

「いえ、とくべつどうってことはないんですが、とにかく……」

利夫は先にたつて階段をのぼりはじめた。やれやれ、結局は銀子の部屋をのぞかなくてはいいのかと信次郎は苦笑したが、利夫の表情からしてなにか見て欲しいものがあるに違いなく、好奇心も刺激されたが、うっとうしい感じもしなくなかった。

銀子の部屋の襖をあけたとたん、一時期前の老人ホームの一室をのぞいたような思いにとらわれた。

白い壁だけが目立つ、もののほとんどない部屋であった。小ぶりの整理ダンスが一つ。丸い古風な黒塗りのチャブ台。そのチャブ台のうえには小型ラジオ。そのほか、花びんもなければ絵や写真もかざってない。

「伯母さん、部屋にものを置くのいやがって。テレビぐらいいいじゃないの、おかせてよといってもそれもいらないって」

利夫は信次郎の背後から首をつつ込み、いいわけがましくいった。

「そのへんに座ってください」

そういわれても、座ぶとん一つなかった。

「伯母さん、座ぶとんもきらいで……」

信次郎が畳の上にあぐらをかくと、それを待ちかねていたように利夫は整理ダンスの上部の小引出しをひき抜き、目の前にもってきた。

「ゆうべ、整理ダンスのなかを一応見てみたんですが、これがちょっと」

ちょっととはどういう意味なのかという視線をむけると、利夫はあわてたように、

「いやあ、ほかの引出しは、整理していいものと残した方がいいものとのだいたいの区分けがついたんですが、このなかのものをどうしていいかわからなくて……」

そういうながら、二、三のものを手にしてみせた。何枚かの写真を無造作にゴム輪でとめたものの、古い財布、扇子……。

女の場合、こういった引出しをなんと呼ぶのだろうか。男の場合はたいていガラクタ入れと称して、こわれた万年筆や時計、そのほか小さい頃からなぜか手元に残ってしまった虫眼鏡とか切り出しナイフ等々を入れておくスペースをもっており、信次郎もご多分にもれず書斎で使っている机の袖の引出し二つをそれに当てていた。

銀子のそののなかは、五十半ばの女の持ちものにしては色彩の乏しいものばかりであった。

写真は七、八枚で、ぜんぶモノクロ。それも当然で、彼女の子どもの頃の写真ばかりであった。彼女ひとりのもの、岩田楼の前で弟芳太郎と着飾って写されたもの。同じようにして父源三と母勝江が加わっている写真……。やはり一番多いのは芳太郎と一緒にのもので、きょうだいで河原遊びをしている写真が数枚あった。いずれもアルバムからはがされたあとがあり、なにかの整理の折にこれだけは捨てるわけにもいかず、仕方なくゴム輪でとめて引出しにほうり込んだといった感じである。